

## 「授業」「テスト」「評価」の一体化を 近世のテスト事例から評価について考える

東大阪市立小阪中学校 河原 和之



### 1 はじめに

私は、学校現場が「評価に翻弄される」昨今の事態については早急に改善されるべきであると考えている。教材開発や授業方法の研究に全精力を傾けるべき教科教育に「毎日が評価」という傾向を改めるべきだということである。それでは、細分化された「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」をどう評価していくのか？ 本校では、定期テストの問題の項目を評価基準にあわせ作成し、評価するようにしている。このことによって、子どもたちは、自分自身の弱点や得意とすることに気づいていく。当然、テストに出題するのであるから、授業の中身も、この評価項目を念頭に置いた内容にならざるをえない。

第二に相対評価から絶対評価へと変わったにもかかわらず、観点別でみるとテスト問題が「知識・理解」を問う問題が多いということである。テスト問題の作成にあたっては「知識・理解」のみでなく、他の観点をも念頭にいった作問技術の向上が必要である。「覚えているだけで解ける問題」から「覚えているだけでは解けない問題」への転換である。

第三に「評価」は教師の特権ではなく、生徒同士や外部機関もふくめた評価が必要であるということである。いわゆる「通知表」的な狭い意味での評価というのではなく、広い意味で評価ととらえ、必要に応じて、生徒同士の作品の相互評価や、歴史認識にかかわる意見の交流を行っている。

「関心・意欲・態度」の評価や「歴史の学び方」という視点から、タイムトラベラー社の社員になったと仮定し、「時間旅行企画書」を作成している。「見所」「体験場所」「おみやげ」「持ち物」「人物インタビュー」などを旅行パンフとして作成し、お互いが相互評価を行う。また、各定期テストでは、「思考・判断」を問う200字程度で答える記述問題を作成している。その意見を「紙上討論」を通じて、お互いの交流・批判、そして生徒相互の

評価活動を実施している。

本稿においては、どのようなテスト問題を作成し評価しているかを軸に「授業」「テスト」「評価」の関連について論述する。

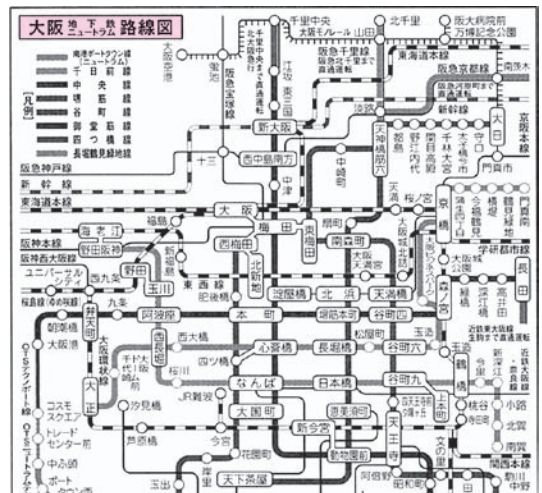
### 2 教科書の資料を使ったテスト例

2003年12月1日に実施したテスト問題の一部を紹介する。

#### 1. 次の資料や絵を見て各問いに答えなさい

**A** 「当時日本では牛馬にわらじをはかせていました。山道が多く、雨ですべりやすい日本では、蹄鉄よりわらじのほうが適していたからです。また多くの大名行列や、全国から大阪に集まる商人を見た彼は、日本では、他のアジア諸国より、旅行がさかんであるとしています」

- (1) この文章を書いたのは当時長崎で医者をしていたドイツ人です。だれですか？
- (2) 全国から商人が大阪に集まってきましたが、このことから大阪は別名何といわれましたか？
- (3) また、全国の特産物がおさめてある蔵を何といいましたか？
- (4) 次の「大阪の地下鉄路線図」から、(2)と(3)の証拠になる駅名を書き、その根拠になる理由を述べなさい



- (5)このころの「大阪」についての歴史新聞を作成しようと思います。あなたなら、表題を何にしますか？
- (6)また、この新聞の内容として適切な記事を三つあげなさい
- (7)大阪には、どのような経路をたどって商品がはいってきたのだろうか？ 北海道（えぞ）からの昆布の経路によって説明しなさい
- (8)旅行がさかんであったと彼は言っていますが、江戸時代、旅行がさかんであった理由を二点考えてみよう

教科書掲載の資料や絵図を使った問題を作成し資料分析を行う。Aは「シーボルトの見た日本」（p.121）を使ったテスト問題である。このシーボルトの資料からは元禄バブルの実態が明らかになる。キーワードは「旅」である。旅行がさかんであった背景を考えさせることから、この時代を多様な観点から考えさせたい。整備された街道、宿場町、そして、旅費を工面できるほど豊かになった庶民の生活、商品経済の発達などがその要因である。この資料から、以上のような時代背景が読み取れているかが評価のポイントになる。(1)から(3)の設問は「知識・理解」を、(4)からは「興味・関心・意欲」を、(5)(6)は「技能・表現」を、(7)(8)は「思考・判断」を問う問題である。当然、それぞれの観点は複合しているが、便宜上、どれにより重点がおかれているかということから観点を決めている。授業では、「どうして、淀屋橋というの？」「肥後橋の名前の由来は？」「昆布の消費がどうして大阪・沖繩は多いの？」など、子どもの「興味・関心」から「歴史のしくみ」へとせまる手法で実践した。一連の問題は、この授業の延長上にある。

**B**（大塩平八郎の檄文を使った問題 略）

**C**下の絵についての江戸時代の二人の庶民の会話文の（ ）にあてはまる言葉をいれ、各問いに答えなさい

熊さん「この絵はオランダのある有名な画家の作品だよ。だれの作品か、知ってる？」

八さん「知ってるよ。かの有名な（ ア ）だろ」

熊さん「この人は1853年に生まれ、1890年になくなっている。この人の生まれた年に日本にやってきたアメリカ人が誰か知らないだろうか？」

八さん「馬鹿にするんじゃないねえ！（ イ ）だろ」

熊さん「この絵の背景になかなかいい女性の絵が描かれているが、これが（ ウ ）版画の手法だよ」



八さん「ということは、あの偉大なオランダの画家が日本の手法を学んでいるということだよ」

熊さん「この人は絵の手法を東海道五十三次を描いた（ エ ）から学んだらしいよ」

八さん「すごいよ。俺も版画を買いに行こうと思っただけどどう思う？ 高いかな？」

熊さん「（ オ ）」

八さん「女性の髪形を島田まげというよ。うちのカカアもこの髪型はなんだけど、髪結い業なんてのもあって贅沢になったもんだ」

(1)この会話文にある時代の文化を何といえますか

(2)「島田まげ」が江戸時代の社会の変化にあてた影響について述べなさい

この問題は教科書p.135の「ゴッホの絵に描かれた浮世絵」から作成したものである。(ア)～(エ)は「知識・理解」を、(オ)・(2)は「思考・判断」を問う問題である。授業でも、この絵を使い、世界的に有名なゴッホが日本の浮世絵の技法から、多くのことを学んでいる事実を考えさせたが、子どもにとっては驚きだったようである。

また、この単元では、化政文化の大衆性に着眼した授業を行った。「浮世絵」版画が安価だったのはなぜか、その背景の学習や、「島田まげ」についても、子どもたちが興味をもっている髪型なので、19世紀初頭の学習を実践した。多くの生徒が的確

な答えを書いていたので、少し、「島田まげ」について解説を加えよう。

18世紀なかごろ以降、島田まげ系統の複雑精巧なまげが生み出され、素人が結うことはむずかしくなり、女髪結い業が一般化していく。結い賃は19世紀初頭では100文であったが、のちに50文、32文あるいはそれ以下になっていった。女髪結い業の登場は家の内外で忙しく働く中下層の女性にとっても、自分で結うよりも手ばやく、しかも髪型が長持ちするので便利なことであった。

さらに、髪型の変化は女性の風俗の変化につながった。複雑精巧な髪型を守るために日よけ具は、菅笠から日傘に変わった。化粧は、生え際の美しさを追求する方法になった。女性の地位の低かった江戸時代も、後期になると商品経済の進展に伴い、庶民の女性たちは旧来の規範をこえて活動しだした。この象徴が「女髪結い業」である。

### 3 インタビュー形式で多様な見方を問う

江戸時代の三大改革に関する問題である。それぞれの基礎知識を問う問題（「知識・理解」と次のような「関心・意欲・態度」「思考・判断」「表現・技能」に関する設問を用意する。

- (1) 吉宗は目安箱をつくり庶民の意見を聞いたが、あなたがこの時代に生きていたとして、どのような提言をしますか？
- (2) 吉宗、田沼意次、松平定信、水野忠邦から一人を選び、あなたが当時の「瓦版」の記者だとして、どのようなインタビュー記事をかきますか？ 三つのインタビュー項目を考え、それぞれの答えも書きなさい。

(1)は「関心・意欲・態度」の評価基準として位置づけた設問であるが、当時の時代背景ぬきには答えられない設問であるので「思考・判断」力も必要になる。(2)は、歴史を相対化する見方を育てる発問であり、いくつかの意見を紹介しつつ、歴史に対しては多様な見方があることを考えさせる。「田沼意次」についての<解答例>を紹介する。

#### <解答例 A>

記者「あなたは、何を改革しようとしたのですか？」

田沼「幕府の財政難を解決しようと思いました」  
記者「あなたのやり方は商人からいろいろをもらうというまちがったやりかただと思うのですが？」  
田沼「確かにいろいろはよくないですが、商人もかなり儲けていたのでいいのではないですか」  
記者「あなたは、このお金を有効に使いましたか」  
田沼「蝦夷の探検や新田開発にも使いました」

#### <解答例 B>

記者「あなたに対しては、いろいろ政治など良いことを聞きませんが、何かいいわけはありますか」  
田沼「今まで幕府は商人に目をつけませんでした。そこに目をつけた私はすごいと思うのですが」  
記者「吉宗さんは、幕府の財政難をなくすために倹約を奨励しましたからね」  
田沼「それに年貢をアップするためにはどうするかということが中心でした」  
記者「なるほど！ それによって、このあと一揆が多くおこりますね」  
田沼「商人との結びつきだけでなく、印旛沼の開発などのよいことをしたこともわかってほしいですね」

### 4 おわりに

「授業」「テスト」「評価」が三位一体となって学習が展開されるべきである。あたりまえのことであるが、現場では往々にして「ノートの提出回数」「発言回数」「忘れ物」などで「興味・関心・意欲」を、「プレゼンの仕方」で「技能・表現」を、そして「作文の論旨」などで「思考・判断」を「評価」することがある。一般的には、以上のような学力も必要であり、否定するものではない。しかし、あくまでも「歴史の評価」なのである。教科の特性をふまえた評価でなくては、子どもも何をどう努力すべきなのか明確にならないし、教師の教材開発や授業方法の改善にはむずびつかな。たかが「評価」されど「評価」である。